

平成 28 年度図書館情報学海外研修報告書(抜粋版)

情報学群 知識情報・図書館学類

201513127 三島悠希

研修目的

カンボジアは 1975 年から 79 年にかけて、ポル・ポト政権による大虐殺が行われ、知識人がいなくなり、書籍は燃やされ、人口の 85%が 14 歳以下となった国である。その影響もあり、教育制度や本を読むことができる環境が整ってきたのもつい最近の出来事である。しかし、まだまだ整備が整っている訳ではなく、昨年 3 月に小学校の視察に行った時も本はばらばらに積まれていたことが印象に残っている。

本研修では歴史的背景の影響も踏まえ、カンボジアでの図書館と書籍、そして、教育に関する現状を現地にいる人に話を伺いつつ視察を行う。実際に話を聞きに行くことで、カンボジアでの図書館事情について調査を行い、カンボジアではどの部分が発展しどこがまだ不十分なのか、そして、どのような支援が実現可能かを知ることを目的とする。

期間 平成 29 年 3 月 1 日—19 日(19 日間)

訪問国 カンボジア(プノンペン、シェムリアップ、シアヌークビル)

主な訪問先 JICA プラザカンボジア、Bookbridge、国際日本文化学園、CJCC Library 他

研修内容

1. JICA プラザカンボジア

国際協力機構（JICA）カンボジア事務所内にある国際協力の情報センター、JICA プラザカンボジア内のライブラリーコーナーには、カンボジアにおける国際協力や JICA 事業に関する資料があり、誰でも閲覧可能となっている。今回はカンボジアの教育に関して、JICA の職員の方に実際にお話を伺うことができた。話を聞き、カンボジアにおける教育事情、日本の NGO や支援団体に関して学ぶことができた。

2. Bookbridge

10th January 1979 High School 内に構える Bookbridge は図書館兼英語、クメール語の学習センターである。本の貸出だけでなく、学習段階に応じて英語の授業を開講している。今回訪れた際にはイタリア人の女性スタッフと、カンボジア人の女性スタッフの方に案内をしていただくことができた。

Bookbridge では貸出期間は 2 週間で一度に 2 冊、無料で本を借りることができる。館内の図書はそれぞれの図書が、簡単な主題で分類されたあと、クメール語、英語に分けられ、さらにその中でも言語の難易度順に図書が並べられていた。細かい分類番号はないとのことだった。

図書館内に来ていた子どもはみんな英語を流暢に話しており、普段から日本の特撮やアニメを見ている生徒はその話を積極的にしてくれた。今回は何人か図書館に来ていた生徒がいたので、一緒に折り紙を折ったり、日本のアニメのキャラクターのイラストを描いたりした。

3. 国際日本文化学園

国際日本文化学園はシェムリアップにある学校である。ここでは日本語や柔道、空手、様々な日本に関することが勉強することができる。この学園には一二三図書館という図書館がある。学園長である鬼一二三先生が自分は本が大好きなのに、シェムリアップには図書館がなかったという理由から図書館を開館したそうだ。図書や本棚は寄付されたものだそうだ。私が訪れた際、ちょうど新しく来た図書と本棚がまだ整理されていないままだったため、その場で出会った日本人、現地の学生達と2日間にかけて書架の整理を行った。

2日間と短い期間だったため、作業は少ししか進まなかったが、図書が入っていた段ボール箱はなくなった。

4. CJCC Library

CJCC Library 王立プノンペン大学内の敷地にあるCJCC(カンボジア日本人材開発センター)のCJCCでは日本語、英語、クメール語の授業が学生や日本企業の研修生に向けて行われている。そのため、館内には日本の図書が多く配架されており、日本語学習に関する図書が多く揃っている。配架方法も日本と同様のNDC(日本十進分類法)が使われている。朝から夕方まで多くの利用者が日本語や英語の勉強をしていた。CJCC Libraryで図書を借りるには会員になること、そして、図書に応じてデポジット(預り金)が必要である。

今回は5日間インターン(ボランティア)として4月に新しく購入する日本語図書のブックリストを作成した。現在、図書館には日本語の図書が多くあるが、日本語学習者にとって、日本の通常の図書は漢字を読むことが難しい。そのため、日本語では小説はあまり読まないようだった。そこで、今回のリストには日本語の学習段階に応じて読むことができる多読用の図書中心に選書を行った。

おわりに

今回の研修ではカンボジアの歴史・教育事情から、それぞれの学校や施設での取り組みを学ぶことができた。途中、熱中症で寝込むトラブルもあったが、無事に研修を終えることができた。

謝辞

今回、このような機会を与えて下さった図書館情報メディア研究科、知識情報・図書館学類、茗溪会支部 図書館情報学橋会、JICA、Bookbridge、国際日本文化学園、王立プノンペン大学、CJCCの関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。